

(六) 久里村、九ヶ村

久里	一、二八四、五〇四	夕日	一、四四、三一九
柏崎	六七二、三六八、一三三	有喜木	一〇二五、九二一
中原	一九三、四三六、〇四三	原	七一八、一七五
西原	一〇九、六一八、七三三	大野	六七六、一五九
双水	四二九、〇二八、四三〇		
小計	五、二五三、四七九、五二二		

(此新田ハ約十八町二畝二十六步トナル)

(七) 畑河内組、拾ヶ村

畑河内	二七七、五五八、三三八	花房	一六七、四八七
長尾	一四六、四〇七	眞手野	二八一、七九二
重橋	二三四、七五〇	谷口	九一、七七七
内野	二〇八、六六六	畑津	三〇〇、〇七二
辻	二四八、九八一	馬蛤湯	四九七、九一

(八) 黒川組、十一ヶ村

小計	二、四五五、一六二、五〇〇	大黒川	二三〇、三一四
黒川	一七二、七四六、三、五七	黒塩	一一六、三三七
塩屋	三四三、七六八	清水	四二、一八〇
椿原	一五九、六二二	立目	三七、六二二
横野	六七、三〇二	福田	四七二、五一三
幸田	一四一、三六八		
煤屋	一四三、〇三五		
小計	九二七、五五二、四二二		

(此新田ハ約四十七町三段八步トナル)

(九) 井手野組、拾ヶ村

井手野	四二九、三八一、五、四一	原屋敷	一七四、三二〇
府沼	三二五、二〇七、七一〇	小宮原	一三〇、七五二
大河原	二一四、三九〇	高瀬	一五一、二六三

大 曲 一、二七、七二

古 里 一七〇、一四

水 留 三六九、四〇〇

志 氣 一〇九、三〇七

小 計 二、一八七、一七

(此新田八約二十二町七段二步トナル)

(三) 神田組、七ヶ村

神 田 一、六〇二、四三

成 淵 一三八、七六

重 河 内 一〇九、一五

奥 村 三六、二八

唐 ノ 川 一四四、六七

竹 木 場 七二、六一

菅 牟 田 六九、三九

二、一七三、二九

小 計 六八、二八

(此新田八約十二町八段九畝トナル)

(二) 佐志組、八ヶ村

佐 志 一、四三三、八一

見 借 五七七、四八

唐 房 八二、七三

浦 六一三、三九

鳩 川 一〇五、七六

相 賀 五四二、二一

湊 一、五六九、七五

神 集 島 一一五、〇三

小 計 五、〇四〇、一六

(此新田八約二十町六段一畝二步トナル)

(三) 馬部組、拾六ヶ村

馬 部 一四八、八九

枝 去 木 一一〇、七四

石 原 一一五、七二

野 中 四一、三四

平 菖 津 三八、二〇

山 道 一七二、〇四

名 端 越 二八、一七

中 尾 七〇、八三

後 河 内 一九二、六六

小 十 官 者 四四、五一

梨 子 河 内 八四、一一

大 良 一四五、八〇

八 尋 峯 三六、〇〇

藤 平 八三、六三

田 代 一七三、四一

永 田 三五、三九

小 計 一、四一、四六

(此新田八約三十二町七段九畝二十五步トナル)

(三) 打上組、八ヶ村

小 計 一、四一、四六





小計	一、九五三、三九 一七五、二一	(此新田ハ約三十三町六畝六歩トナル)
總計	六一、〇九二、六三 三、八一二、二一	六四、九〇四、七四 (此新田ハ約七百十九町二段八畝歩強トナル)

此の外に「幕府御預り所」として次の石高があつた。

村名	本村石高	新田石高
大川野	一、九九六、七五	五、四九二、五
川原	四〇〇、二〇	二、四九二、五
田代	一八四、八三	四、三二九、三
牧瀬	五〇〇、七三	二、二二九、一六
浪瀬	二〇〇、五〇	四、四七、二七
古川	一九五、五一	二、一五九
總計	五、〇三一、一七	五、三二九、七五
	二九八、五八	(此新田ハ約五十六町三段四畝二十八歩トナル)

### 第十編 筑後川流域の干拓

筑後川沿岸の河川干拓も相當あつたことには違ひない。ことに河水氾濫が多く、その流域が古來屢々變更されてゐる。此の大河としては寧ろそれが當然な歸結でもあつたであらう。先づ慶長繪圖に就いて之を見るも、下野村と下村との地先には肥前島と稱する相並んだ三個の島が描かれてゐるし、下つて神埼郡下村郷の内には「こもの郷（小物成郷？）」と云ふのが見え、蒲田郷と此の「こもの郷」との地先には「りんけい島」「黒角」等云ふ河中の島さへ在り、その島のあるあたりは河幅が餘程廣い、而して此の慶長繪圖には大中島も無ければ大詫間島等無論ないのである。

さて然らば此の河川に沿うて如何なる村々があつたかと云へば、三養基郡から先づ高田村（高二百二十三石二斗）、安樂寺村（高百五十九石三升八合）、下野村（高三百三十九石九斗六升）、下村（高千二十九石二斗七升）、千栗村（高五千七百八十四石八合二勺八抄）、矢俣（高四千三百八十二石五斗三升八合六勺）、坂口村（矢俣郷ノ内）、嶋村（西島郷ノ内）、下村郷（高三千九百廿三石六斗二升）、こもの郷（下村郷ノ内）、崎村郷（高二千五百卅石五斗六升）、蒲田郷

(高千四百七十七石一斗五升)、大堂(高千三百五十二石六斗七升四合)、大津(高千五百卅五石二斗四升七合)、寺井(高千二百八十七石七升八合)、早津江(高千四百九十五石五斗三升)、鹿江(高千七百四十一石九斗八升八合)、鱧江(高千九百六十九石五斗二升六合)、鹿子(高千八百六十九石二斗五升八合)、飯盛(高千二千八百三十七石九斗二合三勺)、が載せられ、その坂口村や嶋村、こもの郷等が孰も干拓地であらうと思ふことは、公租が無いのみか、その親村が附記せられてゐるのでも判るのである。

その後壹百年全面的に埋築干拓が勵行せられた結果は、さて、如何になつたか、それは元祿繪圖と對照すれば極めてよく之を明かにすることが出来やう。即ち

元祿繪圖に據ると、三養基郡酒井村の内に筑後河岸に沿うて赤川村と云ふのがあり、次で水屋村(百九十三石餘)、高田村(貳百十九石餘)、安樂寺村が今度は眞木村ノ内と成り、次に不動島村(三百三十四石餘)、下野村(六百八十二石)、次に公租の無い田出島村と云ふのが見えるが、畢竟之等は慶長繪圖の肥前島として擧げられた例の三島が、斯く立派な干拓村を生んだものと云へやう、さらに千栗村(二百五石餘)、石貝村(百九十五石餘)、市原村(三百八十八石餘)、大豆津村(百九十三石餘)、大嶋村(千七十石餘)、江口村(七百七十七石餘)、天建寺村(六百四十二石餘)、南嶋村(七百石餘)、濱田村(四百四十八石餘)、納江村(六百十四石餘)、坂口村(五百十石餘)、大坂間村(三百三十八石餘)、東津村(五百三十九石餘)、松枝村

(六百六十三石餘)、向嶋村(七百四十七石餘)、大嶋村(四百三十三石餘)、迎嶋村(六百二十四石餘)、出来島村・林慶村・崎村(五百二十二石餘)、黒津村・小鹿南里村(三百八十四石餘)、古賀村(四百八十四石餘)、蒲田江村(九百三十石餘)、大堂村(五百四十一石餘)、徳富村(九百十七石餘)、諸富村(四百二十六石餘)、石塚村(二百四十九石餘)、浮盃村(寺井村ノ内)、寺井村(五百四十九石餘)、三重村(九百四十四石餘)、早津江村(八百十三石餘)、崎ヶ江村(千四十石餘)、和崎村・犬井道村(八百十石餘)等の村々が相並んで出来、筑後川の河幅は随分狭小となつてゐる。慶長繪圖に見た「りんけい島」とか「黒角」等云ふのは、早や陸化せられて、此に林慶村が出来、黒津村も載せられてゐる。無論之と同様に筑後國も張り出てゐるに相違ないが、斯くて以前に最も河幅の潤かつた蒲田方面は却つて河幅が、最も狭小となつて居り、その下の方即ち徳富諸富の前面河中には大中嶋村が現はれ、浮盃・寺井の下には之亦新に大多久間島が浮き出で、長サ貳拾八町横十三町と銘打つて早くも村名を附してゐる。後年此の地先きに筑後から大野島村を築立つることとなるが、早くもその根基ともなるべき洲が我が筑後河の吐口に顔を出し初めて、それ、白潟洲・まつ堂・小洲・かうた洲・高洲・大洲等と命名され、我が犬井道村の地先きとなつた所にも、「がんしゑら洲遠一丁(長サ凡貳里云々)あし洗洲等の干潟も見えてゐる。斯くて肥前・筑後の二國は爾來此の干潟を着々征服して、さなきだに元和・偃武以後に於ける内治の物的資源確保に懸命の努力を拂つた

ものである。然り而して茲に吾人が忘れてならないことは、此の筑後川の河川干拓を容易ならしめたものは、實に成富兵庫の力に俟つ所が多い。何となれば、彼は此の筑後の河川が年々に氾濫して幾百の田園を屠り、幾千の堤塘を吞吐しつゝ、民をして遂に自失するまでに至らしめつゝあつたものを、その巧者な土木水利に依つて救済したものであつた。爾來筑紫次郎の名を負うた此の筑後の大川も、彼が智慧眼の前には至つて従順となつて、如何なる大水と雖も之を順調に下流に送ると云ふ有様なので、それ以來は河底の變轉も割合に尠く、遂に克く河岸の埋築に、將又干拓に着々その成功を見たものである。

以上のことを佐嘉藩御新地の公租を記した帳簿等に就いて見るに、

(一) 養父郡

嶋島石入

一反ニ付米三斗

江口村大川向

元新地

一反ニ付米一斗四升代

江口村土居外川端

(二) 三根郡

田方

一反ニ付米七斗 (松枝村古土居外) より

同 四斗 (市場村七郎兵衛屋敷副) まで

嶋

一反ニ付米三斗 (市場村七郎兵衛屋敷西等)

屋敷

一反ニ付米六斗 (江見津東町東入口津内屋敷境分等)

畔方

一反ニ付米二斗 (南嶋村等)

元新地

田方

一反ニ付米五斗五升 (坂口村壹角等) より

同 三斗六升代 (南嶋村新宮所等) まで

嶋

一反ニ付米三斗 (坂口村壹角) より

同 一斗 (西嶋村西分) まで

(三) 神埼郡

田方

一反ニ付米七斗五升代 (黒津村中土居下等) より

同 三斗六升 (大島村) まで

嶋 一反ニ付米三斗 (黒津村等) より

同 二斗 (林慶村等) まで

屋敷

一反ニ付米七斗八升 (大嶋村等)

元新地

一反ニ付米四斗五升代 (下崎村土居副) より

同 三斗六升 (上崎村土居副) まで

畠

一反ニ付米三斗六升代 (上崎村土居副) より

同 二斗 (詫田村) まで

以上の通りで慶長繪圖に於て河中の洲島林慶や黒津は、早くも立派な租上に上る陸續きの村として登場して居るのである。

只此に遺憾な點は、我が肥前が早く此の河川干拓に着手せなかつた爲めか、當然こちらに入るべきであらう筈の土地が、今に福岡縣内となつてゐることである。

(附)

久留米石原家記云

寶曆元辛年

(略)

十月十八日寺町云々

洗切濱干出肥前下野村(良吾云旭村内)の濱、此十年程大分崩損、洗切之濱年々干出、依之當年此濱普請有而、手前之方川埋、元來此所四十年程前は今下野村に有一本松は中島に而、當國之松也。其後水筋荒籠兩國より出來に付、一本松の根より百門石垣とて、肥前領より筑出候に付、一本松の中島肥前の内に成。其後竹植立に付、今は矢もくぐらぬ程に見る。其水筋替り候而、又々肥前領崩、當國之内段々干出。此已後數年經は、此所に人も住居致へしや。世の中のさためなきためしかくのことし。向島作出町、此町筋古の川岸に而有之由、古汐請土居取除地ならし有。

——(大 尾)——



昭和十六年五月二十日印刷  
昭和十六年五月三十日發行

編纂者 佐賀縣耕地協會

佐賀縣廳內佐賀縣耕地協會

代表者

發行者 溝口宗忠

福岡市渡邊通四丁目一九〇

印刷者 間藤次郎

福岡市渡邊通四丁目一九〇

印刷所 秀巧社印刷所

電話西〇二八八〇三八番

771  
475  
-----  
1246

16098





